
刻の涙（ネタ

へんたいにーと

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

刻の涙（ネタ

【Nコード】

N1595BA

【作者名】

へんたいにーと

【あらすじ】

機動戦士Zガンダムのファンフィクションです。

20代半ばの主人公がZのキャラクターに憑依する……といったお話になります。1話の段階で既にDSのエマ、暴力的なブライト成分が検出されますのでご注意ください。

プロットとか作ってないのでかなり締りのないゆるい小説になりそうです。基本的にネタ小説ですので、原作が汚されるのが許せない方、作者に向上心とか絶えぬ努力を求める方は読まれないほうが

いいかと思えます。

続けるかどうかは読まれた方の反応次第ということで、
適当に感想等頂けたら嬉しいです。それではどうぞ。

ブローグ

ブローグ

「ふざけんなよおおつ糞がああああ！」

この世界に来てやけにいい声で俺が初めて口にした台詞だ。

俺は今、モビルスーツに乗っている。機種はガンダムマークⅢ、3号機。勘のいいガンダムオタクの人はもう気づいたかもしれない。この機体はジェリドが乗っていたものだ。それに俺が乗っている。そうなんだよ、俺ジェリドになっちゃったみたいなんだな、これがああ自己紹介がまだだったね。俺の名前はルパ〜ン三世。ではなくて、吉田太郎。フラン大学を卒業後、コンビニアルバイターとして活躍しているしごく普通の20代NAKABA。それがどういうわけかアニメ機動戦士Zガンダムの世界というかお話の中というか、まあ俺にもよくわかってないからなんて言えばいいのかわかんないんだ。

いや実は少しならわかってる、認めたくないんだけどね。このちっぽけなコックピットに来る前に一度神様のものに会ってるんだよこれが。

いやあビビったね。　　おいおいちよつと！飽き飽きするなよ。まあわかる、ネット小説での常套句だもんなこれ。でもなあそんな創作活動の常套手段が実際に起こったんだからそりゃあビビったんだよ俺は。

神様はなんというかおたくっぽかった。デブで禿げてて眼鏡の東洋系のおっさん。恰好も下は青いプーマのジャージで上は神様って文字がプリントされてる白Tのみ。

炬燵に入りながらジェリド×カミーユのBLEE同人を読んだ。
君たちはこんなもの慣れてるだろうから鼻で笑っただけだろうけど、
俺は超ビビったね、神威のカケラも無えんだから。

「あのすいません」

恐る恐る声をかけると神様はエロ同人から目をあげ、油で曇ったレンズの黒ぶち眼鏡をむくんだ中指でずりあげながらこっちを見た。

「あ、きたの？はいはい」

軽い調子でそう言っていると俺の事を上から下までジロジロと値踏みするように見た挙句、

「君たち下等生物のエロ同人。うん、いいね。こういうベクトルの創作もいい。糞虫の癖にやるじゃないか。」

そつのたまった。俺は固まった。

「……あの、ここどこですか？」

「ガンダム、そうガンダム。あれもいいね。なかなか面白い。キャラクターがいいようん。君にはエロ同

人っぽく活動できるような祝福をあげよう。そうだな……BLEEもいいしペドでもSMでも、スカトロ腹ボテ、カニバリズムとんでもござれだ。まあノーマルに勤めてもらってもかまわないよ。僕から言える事はひとつ、死ぬまで変態でいてくれたまえ……以上だ」

何言っただこいつ

「なに、心配しなくても大丈夫。君ならきつとできるさ。じゃそういうことで」

「え？」

そして俺はティターンスのジェリド・メサ中尉となつて墜落したガンドムMk-?のコクピットに搭乗しているというわけだ。

墜落した先はグリーンノア1における連邦軍本部ビル。本部ビルに背部をつつこんで尻もちをついたような格好のマーク?の足元には、連邦の兵士たちが事態を収束させるために動きだしているのが見て取れた。

俺はこの世界に来てから二度目の叫びをあげる。

「ふざけんなよおおつ糞がああああ！」

1話

第一話

（やあ諸君。ジェリドメサの身体に憑依した吉田太郎こと俺は、神への怒りをその美声余すことなくコクピット内で罵声の限りを響き渡らせていた！……のだがいい加減外に出ないと3号機の回収、撤去ができないので外に出たところで周りの兵から階級を無視したからかいの数々を受け、再び堪忍袋の緒が切れる事になったんだなこれが。）

「ジェリド中尉が落っこちたつてよ！」

「ジェリド中尉があ？ドジばっかやってるようじゃティターンズ失格だな！」

足周りでゲラゲラと笑っている下士官達はジェリドがコックピットから出てきて顔を覗かしてもまだ嘲笑っていた。

「うるせえぞ三下共があああッッ！ボケえ！カスう！チンピラアアア！！！」

一瞬にしてあたりが静まり返る。多くの冷ややかな眼差しがジェリドを射ぬぐが、ジェリドは止まらなかった。

「……俺のせいじゃねえぞッ！バカ野郎コノ野郎ッ！！神を恨め！神を！」

3号機墜落事故のせいで被害を受けた、今まさに護送されようとし

ている怪我人へ捨て台詞を吐いてコクピットから足へ、足から地面へと降り立つとヘルメットを脱ぎ、思い切り地面にたたきつける。ヘルメットが地面にたたきつけられた瞬間、轟音がコロニー内に響き渡り、一拍の間の後サイレンがけたたましく鳴り響いた。

「空襲警報ッ！！空襲警報ッ！！」

その音を合図に静止していた兵たちが一斉にあわただしく動き始め、蜘蛛の子を散らすように去って行った。

「神のせいにしてやがつてるぜ、ほんとティターズにろくな奴はいないよな……」

「おい、聞かれるぞ」

残った整備兵達がボソボソと陰口を言いながら3号機を運搬用トラックに乗せるために各々の仕事をこなす。

「オノーレエエ!!!そこうるせーぞ!バーカバーカ!」

ジェリドはサイレンが響く中耳をそばだて怒鳴り散らしていた。この整備兵たちに何の罪もないのだが、感情が安定しない。鼻息荒く怒りを誰かにぶつけて発散させていたのだ。

それくらいジェリドは自分の境遇に腹がたつた。否、その境遇にさせた神こそに腹が立つた。

(神ぶっ殺す……マジで神殺す神殺す殺す殺す殺す殺す殺すコロスウウウウウウウウウウ！キエエエエエエエエエエエエイ！！)

（何で俺がこんな目に会わなきゃいけないんだボケカスチンピラボケエエエエ）

ジェリドは自分のことしか考える事が出来ずに、あたり一帯に怒鳴り散らした。だからこの後すぐにその報いを受ける事になる。

「ちょっと！ジェリド・メサ中尉ッ！」

背後から甲高い声で呼ばれてもジェリドはなれない名前のため数秒気付かなかった。

「……あ、俺か、ナンダボケコラアアア！！！」

振り返ってその声の主に思い切り顎をしゃくって眼を飛ばす。ガンを飛ばされてもその人物は臆せず、乗ってきたジープから颯爽と飛びおりと、胸ぐらをつかんできた。

「ジェリドメサ中尉！無理な行動がこういう結果につながることは十分に分かっていたはずですよ」

ぐつと顔を寄せてジェリドの目からその緑の瞳を離さない人物にジェリドは大いに焦った。

「あ、あんたは！……エマ・シーン！」

そう、エマ・シーン中尉である。ダークブラウンのショートヘアの上に濃い紺色のベレー帽を頭に乗せており、ベレー帽にはティターンズのワッペンがワンポイントでしつらわれている。

全身はジェリドと同じティターンのシンボルカラーであるネイビーブルーのパイロットスーツに覆われていた。日系9世だと言う彼

女のきめ細やかな肌の色にはその名残が強く表れていたがその瞳は美しく、鮮やかな緑色で磨き抜かれたエメラルドのようであったし、肌の色以外は顔のどのパーツをとっても日本人の血はあまり感じられなかった。

スタイルも出るところは出ており、24歳という妙齡のエマを目と鼻の先に目の前にしジェリドは思わず尻込みした。

「禁止されている超低空飛行を居住区行うとはどういう了見？人にボケだのなんだの言う前にちゃんとした操縦を行ったらどうなの？だいたい我々は自力でモビルスーツの回収をする力をつける訓練だつてやってきたわ。それがこの体たらく……あなた、パイロットをやめたら？」

（圧倒的破壊力ッ！！！！！！）

エマ・シーンは俺に一気に捲し立てると、胸ぐらをひとまず離し俺の出方を待った。

「……に………た」

「え？何？聞こえないわ？軍に入った時声の出し方は最初に習ったでしょ？サイレンが鳴っているんだから……」

態度に軽蔑した色を見せるエマ。

「本当にすいませんでしたーっ！！ボケとかコラとか墜落したりしてほんと申し訳ありませんでしたーッ！！」

斜め45度の角度でエマに頭を下げたまま固まるジェリド。神にも

たらされたその怒りは完全にエマの氣勢によつてそがれ萎えしぼんでいた。

頭を下げたまま固まるジェリドを見降ろしながらエマは一言も発さない。時たま腰を曲げたままチラツと顔を上げエマを見上げるジェリドだったが、エマは冷徹に見降ろし続けるためジェリドは慌ててまた頭を下げて固まる。

その光景にエマは人知れず快感を覚え、股がうずくのを感じたりしていたがジェリドに知る由もなし。彼女は生粋のSであった。

この膠着を解いたのは連邦軍の制服に身を包んだ黒髪の男、アニメでは白目の描かれない事で有名なブライト・ノア中佐だった。

「何をしているツ！警報が聞こえないのか！」

ブライトは走りながらこちらへとやってくると整備兵たちに指示を飛ばし始めた。

「ブライトキャプテン！」

エマが尊敬のまなざしでブライトを見る。彼は一年戦争時ホワイトベースのキャプテンとして力を発揮

し、英雄だった。しかし今の軍の上層部からの扱いはとてもその称号に合わぬものであったが、連邦兵たちからの信頼は厚い。

もつともエマのようにティターンズの一員は自分たちの組織以外を格下とみる傾向が非常に強いため、ティターンズの中でブライトに尊敬のまなざしを送るものは少数派と言えた。

エマの凍てつくようなまなざしが自分の後頭部から逸れた事を感じ取ったジェリドはこの隙を逃さずに素早く頭を上げた。流石にもう謝るのは十分だろう。

「だれが頭を上げていいと言ったのっ！」

しかしその目論見は外れエマに怒鳴りつけられてしまった。すかさず頭を下げる。それはもう自然な動作だった。条件反射で下げたまうのだ。

（こうして人は調教されていくのかな）

ジェリドは頭を下げながら悲しみにくれた。

ブライトは周辺の兵に一通りの命令を終えると、まだ頭を下げているジェリドの金髪を掴み、強引に頭をあげさせた。

「対応しろと言っているのがわからんのかッ！」

「痛ッッ痛いイタイイタイイタイっすっいたつまじでっ」

「復唱せんかッ！」

髪の毛を掴まれたまま半べそをかいてジェリドは敬礼した。

「ジェ、ジェリド・メサ中尉、……対応します！」

（な、なんか原作と全然流れ違うじゃねーかよッ！みんな怖ええよ何なんだよ。神死ね！神死ね！！）

ジェリドはこれ以上二人のそばにしているとどんな目に会つかかわらないと考え、エマ中尉の乗ってきたジープに飛び乗り、運転手に出すように言う。

「中尉どこへ行くの！」

「た、対応するんです！」

エマの問いかけにジェリドが返答したが、エマが獲物を見るかのような鋭い目でジェリドを睨んでいたためジェリドの声は裏返ってしまっていた。

(K O E E E E E E !)

エマシーンには近づかないでおこうと心に決めたジェリドであった。

2話

第二話

ジェリドを乗せたジープが戦場を駆け抜ける。今しがたまで閑静な住宅街であったグリーンノア1内部は今や戦場であった。エウーゴのクワトロ大尉率いるリックディアス隊は、グリーンノア1に配備されている旧式のジム？ではとても相手にできるものではなく、彼らを止めることができず次々に撃墜されていく。

ジープが猛スピードで幅広の道を駆ける。風圧により目をしばたたかせながらもジェリドはその光景に目を離せずにした。

「また一機やられた！中の人は無事なのか！？」

命の瞬きをジェリドは今、目にしているのだ。

「ふ、伏せてくださいい！」

運転手の突然の叫びに、ジェリドは素直に従った。ジープ進行方向付近で、リックディアスへ牽制のバルカンを放っていたジムの薬きょうが、道路に落ちた拍子に飛び跳ねて、こちらへ向かってきていたからだ。

ブオオンツと薬きょうの空気の切り裂く音と、道路にドラム缶が跳ねまわっているような音が響き間一髪、ジープの衝突直前でバウンドしたその巨大な薬きょうは太郎達の頭上数十センチをかすめて通り過ぎていった。

「し、死ぬっ！こんなとこにいたら死んじまうぞ、何とかしろ！運

転手！（ドライバー）」

「取りあえず宇宙港にむかいますよ！」

運転手がジープの無線をいじり状況を確認しようとするが、悲鳴や銃声ばかりが入ってくる。

「畜生っ本部は何やってるんだ！コロニーにモビルスーツが侵入してるんだぞ！」

運転手の叫びに連なるように次々とコロニー一体に爆発音が連なつた。ジムがクワトロ隊に墜とされて爆散している音だがジェリドにはミサイルが次々と着弾しているように思えた。

引っ込めていた頭をあげてあたりを見回す。あちこちで煙が上がり、民間人の住宅の中には原形をとどめていないほどく損傷したものもあった。爆裂したジム？の破片が突っ込んだのだろう。ジェリドはゾツとした。こんなの自分の知っているガンダムではない。

（一体この襲撃で何人の人死^{ひとじ}が出るんだ。これじゃあまるで……）

「これじゃあまるで、戦争じゃないか」

自分でも気づかぬうちに発した一言に、ジェリドは驚いた。

（そうだ、何を言っているんだ俺は、戦争なんだよ。ガンダムって……）

「中尉！メサ中尉！……っ失礼します！」

呆然としているジェリドを運転していた下士官の兵士が後部座席へと振り返り、ジェリドの頬をビンタする。

激しい痛みが伝わりジェリドは自分の世界から呼び戻された。いつの間にかジープは止まっている。

「墜落したジムのパイロットがまだ生きているようです。無線で助けを求めています。ミノフスキー粒

子も強まっていますし、我々以外にこの無線を傍受できたものはいないかもしれません。少し引き返すことになりますが助けましょう！」

「あ、ああ。わかった行こう」

ジェリドは頭を振って気合いを入れ直すと、恐怖で唇をかみしめながらも救出することを許可した。

3度ほどジープで道を曲がってほどなくすると足から堕ちたのだろう。ジム？の脚部や装甲がバラバラにはじけ飛んで、家々に突き刺さっている。

家々から上がる粉塵と煙が道いっぱいになり立ち込めており、視界の確保が難しい。数メートル先も見えない状況だ。

速度を落としゆっくりと進むジープはやがて機体の胴体部分を発見した。煙を上げ仰向けに転がっているそれはコクピットを保護する前部装甲がひんまがつているが、開かれていた。

「もしかしたらもう脱出したのかもしれませんが」

二人はジープを下りると徒歩で近づき、安否を確かめた。

「大丈夫かー！まだ生きてるかー！」

煙で目を瞬かせ、喉を焼かれながらジェリドは懸命に叫び、またパイロットも懸命に反応した。よわよわしい声だが、助けを求めている。

「おい、生きてる！生きてるぞ！」

聞き取ったジェリドは運転手に叫ぶと機体へとよじ登るために駆けだしたが、すぐに足を止めた。軍用ブーツの靴底に粘着性の高い液体を感じ取ったからだ。

強いオイルの臭いだ。煙が立ち込めて、家々からは火の手が上がっている。心拍数が上がり、呼吸が浅くなる。

同じく駆けだしていた運転手がジェリドを止めた。

「中尉！オイルが漏れてます。危険です！」

しかしジェリドはその声が合図となったかのように駆けだすと、機体へとよじ登る。

コクピットの中をのぞくと、太ももに鉄のパイプが刺さって座席と縫い合わせられている顔の青いパイロットと目があった。

「こいつを、……抜いてくれ」

顔は青い、唇がかさつき声もかすれている。一目で血が足りていないと分かった。しかしその眼にはまだ力が宿っている。ひとまずパイロットが生きている事に安堵したジェリドだったが、次の困難に頭を抱えた。もしこのパイプが太ももの大動脈を傷つけていれば、引き抜いた後の出血で死んでしまうのではないか。

「ドライバー運転手！こっから宇宙港までどのくらいだ！」

下でこちらをうかがっているだろう兵士に尋ねる。煙の被害は甚大で30センチ先ももう見えなかった。

「10分くらいです！」

「よし。その場で待機しろ。俺が合図したら声を出し続けろ！今からパイロットを抱えてそっちに行くからな！」

「了解！」

声の方向を確認するとパイロットに目くばせする。頷いたのを確認し、鉄パイプをひきぬく。ズズズズとシートをする音や粘着質な水音をたてながらパイプが抜けていく。

「があああああああああああああああああ」

パイロットの悲痛な叫び声と肉を貫くパイプの振動に顔をしかめながらもジェリドは鉄パイプを抜ききった。

パイロットは痛みのもう失神している。ジェリドは急いで背負うと慎重にジムの胴体から降りた。

「声出せー！」

「はい！ここです！ここです！」

喉が煙でいぶされた、ドライバーはかすれた声で叫び続けた。そのかいあってジェリドとドライバー合流するとジープへと進んでいく。ジープは強烈なヘッドライトを灯したままアイドリング状態で置いてあるため、音と光ですぐに見つかった。

パイロットを後部座席へと寝かせると、座席下部に備えられている

医療キットを使い、足を縛った。

本職の衛生兵ではないため止血の仕方もあるか定かではない。一刻も早く本格的な治療が必要だと言えた。

「宇宙港に行けば、医者がいるはず。出払ってても衛生兵はいらっしゃるでしょう。後はナビに従って飛ばすだけです！」

火災が発生している区域から抜けると、タイヤ痕を残し煙を上げながら猛スピードでジープを走行させる。ジェリドは名も知れぬパイロットの足を包帯できつく縛りあげた箇所からあふれだす血を懸命に両手で抑えつけていた。

パイロットの意識は戻っており、苦痛にあえいでいる。そんな状況にもかかわらず3人の瞳には力強さが感じられた。このままだければ全員助かるかもしれないとその望みが3人の心を高めていた。

「あつ！」

突然運転手が叫んだためジェリドが進行方向へ振り向くと、ジム？が一機こちらへ背を向けて空を飛ぶ赤いリックディアスへとビームスプレーガンを乱射している。

「回り道する時間はない。このまま突っ込みます！」

「あつ、おい！」

運転手はそう告げると、ジェリドが制止するようとするのもかわわずさらにアクセルを踏みしめ回転数を上げ、ジム？の足元をすり抜けた瞬間だった。

乱射されたビームを全て避けながら赤いリックディアスは牽制のため、頭部の55mmバルカンをばら撒いた。バルカンはアスファル

トを削りながらジム？の脚部とその周辺に着弾。未だジム？の足元を走っていたジープに迫りくる。

目の前のアスファルトが爆ぜ道路がめくれ上がった。咄嗟とつぱに運転手がハンドルを切りブレーキを踏んだため車体がスピンする。その遠心力に耐えられずジェリドは宙を舞った。

「あああああっ！！」

ぐわんぐわんと耳鳴りを響かせながら景色が急速に変わっていく。車体から振りだされ5メートルは宙を舞ったジェリドはそのまま道路脇の茂みに落下し、背中をしたたかに打ちつけたため呼吸が止まり視界が赤く染まった。

「カハツ……うう」

数秒気絶していたのかもしれない。頭を振って立ちあがろうとするが鋭い痛みのせいで立ちあがる事は困難だった。それでも何とか立ちあがりきると急激に咳き込み、口からドロツとした血が噴き出す。

（……内臓をどっか痛めたのかもしれない）

深く呼吸しようとするすると肺がきしむ様に胸が痛むため、甲高い呼吸音を発しながら浅い呼吸を繰り返し周りを見渡すと、数十メートル先に炎上した鉄の塊となってしまうたジープ、そして人間だったものの数々が散乱していた。

2話（後書き）

誰も反応してくれないので悔しくて結局書いてしまったwwムキー！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1595ba/>

刻の涙（ネタ

2012年1月4日15時53分発行